市政トピックス

市政功労者等を表彰 ―市制施行130周年記念式

7月1日に仙台国際センターで市制施行130周年記念式を行い、市政の発展に功績のあった特別市政功労者20人、市政功労者34人、永年勤続委員84人を表彰しました。

また、会場では、市制施行130周年および政令指定都市・区制移行30周年を記念し、市制開始からの本市の歩みを振り返るパネル展を開催。多くの方が、これまでの歴史をまとめた年表や写真などに、熱心に見入っていました。

今回表彰された方のお名前は、次の通りです（順不同、敬称略）。

◆特別市政功労者（本市の振興発展に著しく寄与された方）佐藤節夫、伊東豊雄、安藤堅太郎、庄司健治、髙野幸子、島貫文好、小池光、中鉢良治、清野智、鈴木賢、海輪誠、平川新

（仙台市議会議員として20年以上にわたり市政の発展に寄与された方）髙橋次男、庄司俊充、佐藤わか子、田村稔、石川建治、岡部恒司、花木則彰、安孫子雅浩

◆市政功労者（本市の振興発展に寄与された方）

（自治・消防功労）関口吉信、酒井典雄、樋口幸二郎、森幾久雄、今野利正、渡邉剛伯、菅井茂、庄子隆、社本啓之、佐久間善行、小金澤佳史、一條久男、生島將光、齋藤文雄、渡邉博吉田正憲、岡本啓三郎、狩野好明、高橋利一

（健康・福祉功労）山縣浩、三浦正雄、米川文雄、千葉貴和子、賀来満夫

（産業・経済功労）扇畑秀美、今野義雄、佐藤稔、遠藤敏夫、遠藤敏雄、岩沼徳衛

（教育・文化功労）大友重義、大林一信、橋本勝美

（環境功労）鎌田耕

◆永年勤続委員（委員として10年以上にわたり市政の推進に寄与された方）

（人権擁護委員）四竈亮真

（仙台市福祉整備審議会委員）秋元俊通、栗原憲昭

（民生委員児童委員）本田忠、三浦志津子、西村林子、髙橋めぐみ、及川裕子、佐藤洋美、大久保佳奈子、岡崎千佳子、鈴木富美子、中根洋子、中村紀代、庄司ゆうこ、屋代純子、黒須践治、石田惠子、遠藤治、安田一雄、柴田糸子、原美香、和久実、今野正志、小原定雄、齋藤葉子、遠藤由美子、島幸枝、針生きよみ

（仙台市障害支援区分判定等審査会委員）神崎了、須知高照、畑中一枝

（仙台市介護認定審査会委員）漆山昌伸、及川真喜子、大方俊樹、大友淳、大森真紀子、菊地明子、金野俊之、斎藤利夫、佐川純司、玉澤茂、丹野雅哉、千葉民彦、長嶋卓矢、針生雄吉、皆川広美、矢尾板啓、山田真司

（仙台市地域保健・保健所運営協議会委員）髙橋由美子

（仙台市動物愛護協議会委員）山口千津子

（仙台市エイズ・性感染症対策推進協議会委員）古賀詔子、伊藤俊広、齋藤敏典

（仙台市感染症メディカル・ネットワーク会議委員）髙橋將喜、西村秀一、飯島秀弥

（仙台市大規模小売店舗立地法専門委員会委員）奥村誠

（仙台市スポーツ推進委員）佐藤英之、坂口清敏、山路慶子、山口春雄、片桐三千男、我妻松彦、志村理智、小松文夫、五十嵐好弘、佐藤正樹、小野寺孝喜、遠藤良朗、星浩二、小川由里子、宮本稔、小林智

（仙台市スポーツ推進審議会委員）中嶋嘉津子

（仙台市建築審査会委員）河野達仁

（仙台市公共事業再評価監視委員会委員）吉田啓子

（仙台市宮城野区区民協働まちづくり事業評価委員会委員）笠井晃、伊藤仟佐子

（仙台市若林区民生委員推薦準備会委員）橋本裕樹

（仙台市文化財保護審議会委員）政岡伸洋、姥浦道生

（仙台市学校給食運営審議会委員）柏崎潤

（仙台市農業委員会委員）髙橋勝彦

市政トピックス

地震の被災地へ緊急支援を行いました

6月18日に山形県沖で発生した地震に伴い、市では「広域・大規模災害時における指定都市市長会行動計画」に基づき、山形県庁に職員4人を派遣。被害状況の把握や必要な支援ニーズの調査を行いました。

また、鶴岡市に6月24日から27日まで職員2人を派遣し、被災家屋の被害認定調査を実施しました。

今後も、被災地への支援に積極的に取り組んでいきます。

市政トピックス

仙台国際音楽コンクールが閉幕

5月25日から6月30日までの約1カ月間、日立システムズホール仙台を会場に、第7回仙台国際音楽コンクールが開催されました。

平成28年以来3年ぶりとなる舞台には、15の国と地域から73人（ピアノ部門37人、バイオリン部門36人）が出場。才能あふれる若き音楽家たちの熱演が聴衆を魅了しました。期間中、延べ9765人が会場を訪れ、出場者の演奏に温かい拍手を送りました。

審査の結果、ピアノ部門の第1位にチェ・ヒョンロクさん（韓国）、バイオリン部門の第1位は該当者がなく、第2位（最高位）にシャノン・リーさん（アメリカ・カナダ）が選ばれました。

ピアノ部門第1位のチェ・ヒョンロクさん

バイオリン部門第2位のシャノン・リーさん

市政トピックス

新たなミュージアムの魅力を発信

6月21日、「SMMAミュージアムトークテラス」がせんだいメディアテークで初めて開催されました。これは、市内のミュージアムが連携して事業を実施する「仙台・宮城ミュージアムアライアンス（SMMA）」の取り組みの一つで、参加館の学芸員やスタッフが、専門性の高い話題をやさしく解説するもの。

今回は、「女性ファッション雑誌の変遷・歴史」をテーマに、女性誌がどのような変化をたどり、文化を発信してきたか、雑誌を通して見えてくる歴史を、講師の東北大学史料館准教授の加藤諭氏がラジオパーソナリティー・小川さなえさんとの掛け合いでお話ししました。参加者は自由に食事や飲み物を楽しみながら、2人の息の合ったトークを楽しんでいました。

このイベントはシリーズとして今後も開催。ミュージアムの新しい楽しみ方をお届けします。

このほか、市内各地で音楽を身近に楽しめる企画も開催。惜しくもセミファイナルに進めなかった出場者による「チャレンジャーズ・ライブ」には多くの人が訪れ、世界レベルの演奏を楽しみました。

3・11震災文庫を読む 23

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

震災の「叫び」

東北学院大学文学部教授　渡辺　通子（みちこ）

「大槌町駐在指導主事の証言 被災の町の学校再開」

望月善次・関口厚光／編著
岩手復興書店　刊

東日本大震災の際、学校や教師たちの果たした役割は大きいものでした。多くの学校が避難所となり、住民たちの緊急事態の生活を支えました。だだっ広く冷えた体育館で、見知らぬ者同士がどうやって過ごすか、届いた救援物資をどう分けたらいいのか。日頃から児童や生徒集団を動かしている教師たちのもつノウハウが発揮されたのです。このことを学校や教師の視点からまとめたのが本書です。瓦礫（がれき）の中から、最初に町に踏み出したのは子どもたちでした。学校が再開したからです。そして大人たちも復興への息吹をあげていきました。本書は岩手県大槌（おおつち）町の一女性指導主事（当時）からの聞き書きを基にまとめたものです。ここ仙台、宮城にも、同様に粉骨砕身した方々が多くいらっしゃいます。

「東日本大震災を詠（よ）む」

俳句四協会／編
朝日新聞出版　刊

本書は、後世への歴史的な遺産として、かつ俳人たちの今後の創作活動の礎（いしずえ）となるべく、国内の4つの俳句協会が力を合わせて編んだものです。英語名は「ハイク・アンソロジー」。収められた1114人による2667句からは、震災後を生きるということは、「言葉と生き直すこと」でもあることが伝わってきます。

収録作品の中から、叫びのような俳句を紹介します。叫びとは大声を出すことだけではありません。小さな声であっても、腹の底から絞り出すようなつぶやきもまた叫びです。

「3・11ナースコールを押しつづけ」　千葉信子（千葉）

「赤子泣く仮設が住まひ大夕焼」　富樫文子（宮城）

「夏蝶に瓦礫は見えぬかもしれぬ」　谷口加代（宮城）

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます　問市民図書館☎261・1585